

2017年7月3日掲載

子供の事故に注意
メーカー側 対策着手

幼児が歯磨き中に転んで歯ブラシで喉を突く事故が多発しているとして、消費者庁は最近注意を呼びかけています。歯ブラシのメーカー側は安全対策に取り組み始めています。

6歳児以下の事故は、2010年（平成22年）12月からの6年間に医療機関から消費者庁へ寄せられただけで139件あったということです。

そのうち歯ブラシをくわえたまま歩くなどして転倒したケースが約7割を占め、以下「ソファなどから転落」「人や物にぶつかる」が続いています。年齢別では1歳児が64件と最多でした。1歳児がベッドで歯磨きをしていたところ転倒し歯ブラシが喉に刺さり、3日間の入院を要したケースも報告されています。

これとは別に、東京消防庁が2011年1月から昨年2月までに5歳以下の子どもを救急搬送した事例数をまとめたところ217件あり、毎年約40件にのぼっています。

この流れを受け有識者でつくる東京都の協議会は、歯ブラシに衝撃吸収性を持たせたり、口の奥に入りにくくしたりする対策を強化するようメーカー側に提言しています。

最近になって歯ブラシメーカーでは0～2歳児用や3～5歳児用は、転倒して口に強い力がかかるとゴム製素材を含むネックが曲がる仕組みの製品も作られており、0～2歳児用は同社の従来品より衝撃を95%減らせるということです。歯ブラシのネックが軟らかすぎると磨く効果が下がりますが、素材とデザインで安全性と清掃性を両立できているようです。